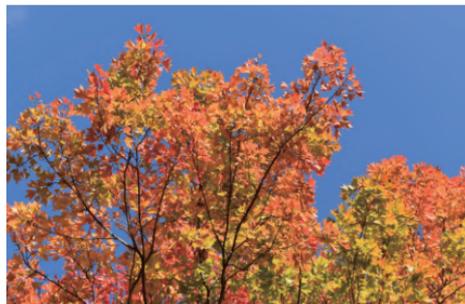




トウカエデ (唐楓)



Acer buergerianum、ムクロジ科カエデ属の落葉紅葉樹の高木である。中国南東部・台湾原産。カエデの葉は手のひらを拡げたようになるが、トウカエデは葉先が3つに分かれる。中国名は三角楓ともよばれる。英語ではtrident (三叉槍) mapleと言う。日本へは18世紀初期に渡来。街路樹として使われることが多く、春日井市内でも見かける。灰色がかった樹皮はささくれたように裂けて剥がれ、見栄えはあまり良くない。種子は他のカエデ同様に平たいプロペラのある翼果で、小さな竹とんぼのように風に舞う。

中央食堂から人文学部にかけてトウカエデの並木道となっている。2022年11月初旬は晴天が続き、

並木道は文字通りみごとな錦秋で、目を楽しませてくれた。紅葉に惹かれたのか、トウカエデにカメラを向けていた学生もいた。

落葉広葉樹が秋にきれいに紅葉するには、最低気温が8℃以下になり、晴天が続き、一日の寒暖の差が大きいことが必要らしい。光合成の効率が落ちると、木は葉への通水を落とす、葉の緑のクロロフィルの分解を始める。葉は残存する光合成力を使って糖を作り、それを赤色のアントシアニンに変える。これがカエデの紅葉の原因とのことである。アントシアニンとその誘導体は500種ほどもあり、白、黄、緑を除く多彩な植物の色となる。フラボノイドと総称される物質に区分され、いわゆるポリフェノールでもある。様々な植物から得られるアントシアニン系の色素は食品にも使われる。それらには抗酸化能や、視覚改善などの効能もあるらしい。

日本庭園を彩るイロハモミジはカエデ属の一種である。葉先が7つに分かれ、「いろはにほへと」と数えられるゆえのみやびな種名らしい。紅葉をモミジとも読むように、秋に色づく草木をなべてモミジ (もみぢ) と言っていたようである。

紅葉が見られる地域は意外に少ないらしく、米国ニューイングランドと日本の東北地方が世界二大

学校法人中部大学 監事 太田明徳



紅葉の地であると、ニューハンプシャー州のフリーウェイ沿いの情報センターのパンフレットにあった。確かに、9月末のニューハンプシャーの所々で、サトウカエデが鮮やかに紅葉していた。北米大陸北東部の先住民族にとって、サトウカエデは集落の大切な樹であつたらしい。合衆国からカナダに入ると穏やかな空気変わるように思われたのは、国旗のサトウカエデのせいもあるかも知れない。根距の高まる早春に、樹皮に小さな穴を開け、管を差し込んで樹液を集める。木の大きさにも依るが、1つの管から1リットルもの糖分を含む樹液が得られ、これを煮詰め、保存可能としたものがメープルシロップである。シラカンパなどの落葉樹からも同様にしてミネラルを含む樹液が得られるが、こちらの糖分は少なく、ほのかに甘みが感ぜられる程度である。しかし、冷やして飲むとなかなか美味しい。

参考)

- ・「朝日百科植物の世界」、第3巻、p3-158、朝日新聞社、1997
- ・「図説花と樹の大事典」、木村陽二郎監修、柏書房、1996
- ・「アントシアニンの科学」、津田孝範ら編著、建帛社、2009